

「敬」の心をもって

—— 人工池のカルガモ親子に思う ——

この晩春、東京・大手町のビル街につくられた人工池でひなをかえし、けなげにも子育てにはげんだ母ガモは、そのビル街のオフィスばかりか、テレビや新聞を通して全国の家庭の話題にもなった。その後、カモの母子は皇居のお堀へ引越したが、はじめて見るお堀の大きさに、子ガモたちはおっかなびっくり、北の国へ飛び立つ術を学ばなくなってしまった。それでも、母ガモは、落胆も叱りもせず、こわがる子ガモに、自分の力で飛び立つ力をつけさせようと、幾度となく、自ずから手本を示して飛び立つて見せた。

子ガモたちのうちには、教えられてすぐ上手に飛び立てるものもいるが、なかには、こわがって飛び立つことのできないものもいる。母ガモは、飛び立った子ガモには、雨や嵐をしのいで飛ぶ飛び方を教えるのであるが、しかし、まだ飛び立てないで独り水面でおどおどしている子ガモには、時に舞い下りて寄り添いながら、飛び立つ術を示して見せるのである。それは、渡り鳥の単なる本能で習性にしかすぎないといえはそれまでだが、そこに、人間の母親にもおとらぬ親心を見てとることもできるのではないか。

思うに、どんな動物でも親心に感じ応えない子供はいないであろう。この子ガモも、母ガモの懸命の養育には、必ずや応えていくものと思う。とすれば、どこにカモと人間の子供との違いがあるだろうか。それは、孔子の言

「敬」の心をもって

業をかりれば、「敬」の心があるか否かにかかってくると思う。ここにいう「敬」とは、わかり易くいえば、親を尊敬する純粋なまごころのことだと見てよい。

今年は、短大創立二十周年に当たる。そこで、大学祭の統一テーマも、それに因んだ 時の鐘——白鳩はとの旅立ち——に決ったときく。そのサブタイトルに「白鳩の旅立ち」という言葉を選んだのは、創立二〇周年を祝う心をこめてのことであろうが、同時に、やがて社会への旅立たねばならない学生自身の自覚を促す意図があつたことでもあろう。

私は、諸姉が、業を終えて社会に旅立つに当たり、自覚すべきは、親を思う純粋なまごころ、つまり「敬」の心を身につけておくことだと考えている。というのは、「敬」の心をもたず旅立つとすれば、かの子ガモの旅立ちと何ら変わる所がなくなるからである。

創立二〇周年記念の大学祭のこのとき、以上「敬」の



短期大学卒業式風景

「敬」の心をもって

心の重要性を説いて筆を擱くことにする。

大学祭パンフレット（昭・61・10・25）



平成5年3月比治山女子